

東北アジアにおける韓国——戦争と平和をめぐる諸問題

李恩政、エリック・バルバツハ (Eric Ballbach)、ベルリン自由大学

現在、朝鮮半島および東北アジアにおいて、政治環境の劇的な変化が認められる。朝鮮民主主義人民共和国(以下:北朝鮮)の核開発プログラムの不穏な展開、北朝鮮の政治指導層に垣間見られる変遷の兆し、日本の政権交代の可能性、数十年振りの大規模な経済危機に直面する中国の新たな展望の模索——以上の状況下、大韓民国(以下:韓国)の李明博大統領は、東北アジアにおける韓国の立場を新たに確立する難しい課題に直面している。とりわけ、李明博が大統領に就任した2008年以降に南北朝鮮関係が明らかに悪化し、隣国の中国および日本との歴史的問題や、くすぶる領土問題もあり、これはとりわけ困難な課題である。

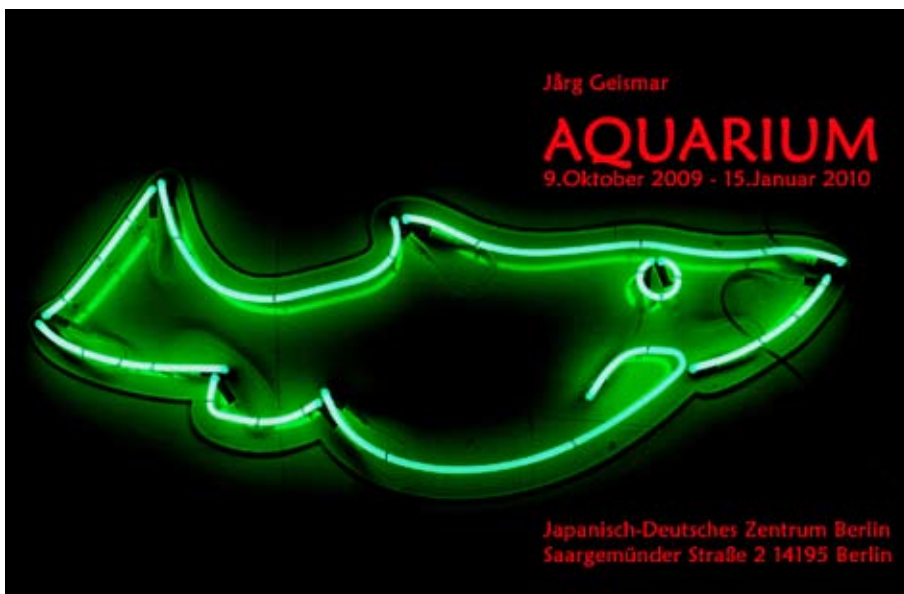
厳しい南北朝鮮関係

李明博の大統領就任以降、韓国の対北朝鮮政策は質の面で変化した。李明博大統領は、「アンガージュマン(自覚的かつ全面的な責任をもつ対処)」を重視した金大中元大統領および盧武鉉前大統領とは大幅にスタンスが異なり、「実践的な対北朝鮮政策」を導入したが、韓国ウォッチャーのなかには、本政策を「ディスアンガージュマン(離脱、撤退)」と呼ぶ者もいる。本政策の中核は、北朝鮮の核放棄と南北朝鮮関係の連動である。韓国が北朝鮮の核に直接的に脅かされる背景から、これは理論的には納得のゆく政策である。しかしながら、本政策によって、韓国政府の影響力が削減されるところより、大きな問題を内包する政策でも

ある。金大中、盧武鉉大統領による「太陽政策」および「平和繁栄政策」は国を開放し、南北朝鮮関係の組織化を図ることを通じて韓国が北朝鮮に対して影響力を行使することを可能とし、北朝鮮との独自のコミュニケーションラインを確立することに大きく貢献した。しかしながら、李明博大統領が北朝鮮への歩み寄り政策と、北朝鮮指導層が米朝二国間問題と捉える核問題を連結したことにより、韓国独自のアプローチの手段が失われた。韓国政府は戦略を立てるのではなく、北朝鮮の崩壊までひたすら待機する姿勢に戻ったようである。李明博大統領の対北朝鮮政策には能動的かつ建設的な基盤はほとんど認められない。

目次

巻頭寄稿文 東北アジアにおける韓国 李恩政、バルバツハ	1~2
編集後記	2
インタビュー ベルリン州都市開発	3
会議報告 ポスト京都とグリーン・ニューディール	4
学術・人的交流事業 青少年指導者日本研修旅行	5
事業報告	6
2009年事業計画	7
ベルリンの壁崩壊20周年	8



Small Fishes, big Fishes (小さなサカナ、大きなサカナ) 光管インスタレーション、ガラスペイントを用いたプラスチックボードのドローイング、写真インスタレーション、映像インスタレーション、サウンド・インスタレーション、ドローイング&スライド・インスタレーション:ヨーク・ガイスマー (Jörg Geismar) 個展『水族館』のオープニングレセプションは2009年10月9日、午後7時開会。

中国および日本との領土問題

それでもなお、韓国と北朝鮮が協力する領域もある。たとえば歴史上の領土問題といったとりわけナショナルかつエモーショナルな問題の場合は、両国が「ひとつのネーション」として中国あるいは日本に対して共同のポジションを採る。たとえば、中国政府が東北振興事業の一環で設置した研究グループが、紀元前1世紀から668年まで朝鮮半島北部、現在の北朝鮮および満州の大部分を支配していた古代高句麗王国が中国の一部であると主張して以来、南北朝鮮の歴史家が共同して、中国の主張を反駁するプロジェクトに携わってきた。また、小泉純一郎首相の靖国神社参拝との関連と歴史教科書問題で、南北朝鮮は共同で日本に抗議した。東北アジア隣国との平和関係を脅かすもうひとつの重要な問題として中国との海境、あるいは竹島(韓国名:獨島)をめぐる日本との紛争など、ほぼ解決不可能と思われる東北アジア地域の領土問題が挙げられる。デエスカレーション(緊張緩和)策にもかかわらず、領土をめぐる紛争の影響は重大で、これをナショナルショービニズムに基づく感情論として過小評価してはならない。それというのも、東北アジアでは冷戦後、何等の信頼配当も平和配当も行なわれず、かえって軍事面での対立が強化されたからである。

東北アジアにおける新しい役割模索

以上のような様々な問題にもかかわらず、あるいは以上のような問題が

存在するからこそ、韓国は隣国との平和共存の道を模索することを強いられている。それは、東北アジアおよび朝鮮半島の安全保障面での検討において、戦争という選択肢が存在しないからである。したがって、朝鮮半島および東北アジアに平和を保障する唯一の現実的な選択肢は交渉および妥協である。それゆえに韓国は、欧州連合(EU)をモデルとする地域共同体の設立を繰り返し唱え、盧武鉉政権は、東北アジアにおける新しい紛争や衝突を回避し、平和および繁栄を保証する秩序を確立するために仲介的役割を担う意志を表明した。盧武鉉政権下の北東アジア時代委員会委員長だった李洙勲(イ・スフン)によると、朝鮮半島における平和なくして東北アジアの平和は不可能なため、韓国が東北アジアの平和秩序の中心となる必要がある。この関連でとりわけ注目に値するのは、韓国が「バランス(平衡を保つ者)」としての意味における地域覇権を請求していることである。韓国は歴史上隣国を攻撃したことはなく、地域の覇権を目指して闘ったこともなかったため、韓国がこのような役割を要求することは倫理的に正当である、という論旨である。しかしながら、韓国の「バランス企画」がナショナリズムの枠を超えられない場合、これが、アジアにおける指導的役割を要請する日本のアジア主義と中国の中国中心主義とどのように異なるのか甚だ疑問である。

『jdz echo』読者の皆様

日本では、8月30日に第45回衆議院議員選挙が実施されますが、ドイツでは9月27日に独連邦議会の選挙があります。本年秋のベルリン日独センター事業にも、これら選挙が反映されます。たとえば、11月初頭に東京で開催する日独フォーラムの会合までには日独各々の新政権が発足し、フォーラムに参加する議員の顔触れが様変わりしている可能性があります。それでもなお、世界的規模の金融・経済危機の克服、東北アジアにおける安全保障をはじめとする課題は日独共通の懸案事項として存続し、日独フォーラム席上で討議されることでしょう。

総選挙以外にはベルリンで開催されるアジア・パシフィック・ウィークおよびベルリンの壁崩壊20周年がベルリン日独センターの秋季事業に反映されます。後者の事業に、1989年11月9日のベルリンの壁崩壊を契機に東京で開催するシンポジウムがありますが、本事業では、過去20年間におけるベルリンの変遷を東京の皆様にご紹介いたします。ベルリンに新しい建物が建てられ、町の様相が刻々と変わる様はベルリン市民だけでなく、ベルリンを訪れる人々をも魅了し、一部批判もされました。ベルリン日独センターも東西に分断されていた町が統一され、ドイツの首都となり、変遷する様を度々取り上げて参りましたが、それは、そもそもベルリン日独センターがティアガルテン地区からダーレム地区に移転した発端が、壁の崩壊にあったからです。ベルリンの壁崩壊20周年記念シンポジウムに皆様方をお迎えできますことを今から楽しみにしております。

フリデリーケ・ボッセ(Dr. Friederike Bosse)
ベルリン日独センター事務総長

jdz echo

ベルリン日独センター広報紙『jdz echo』は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行: ベルリン日独センター(JDZB)
編集: ミヒャエル・ニーマン
E-Mail: mniemann@jdzb.de

本紙『jdz echo』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先:

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel.: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdz@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書室の開室時間は月曜日と木曜日午前10時～午後4時、水曜日正午12時～午後6時です。
9月1日から貸し出しサービス開始!

友の会連絡先: freundeskreis@jdzb.de

李恩政(Dr.、イ・ユンジャン)、ベルリン自由大学コリア学研究所教授、エリック・バルバツハ(Eric Ballbach)ベルリン自由大学コリア学研究所助手。



ベルリン日独センターと東京ドイツ文化センターは、日独の著名建築家および都市計画者を迎え、ベルリンの壁の崩壊20周年目を記念するシンポジウム『壁崩壊後のベルリン——〈ヨーロッパの都市〉としての伝統を守る首都への回帰』を2009年10月27日に東京で開催します。

本記念シンポジウムに先立ち編集部は、1991年から2006年までベルリン州建築・住宅庁の建築担当局長ならびにベルリン州都市開発・環境保護・技術庁次官としてベルリンの再都市化および再活性化を率いたハンス・シュティマン氏(Prof. Dr.-Ing. Hans Stimmann)にインタビューしました。

編集部:「ヨーロッパの都市」というのは为什么呢。

シュティマン:「ヨーロッパの都市」の特徴は、公共空間とプライベート空間の間の緊張感、あるいは社会と個人間の緊張感にあります。道路や公園はパブリックスペースで、それに隣接する建物はプライベートスペースですが、それら建物の「顔」に当たる正面は道路に面しています。つまり、道路を歩く人は、パブリックスペースに面するファサード(建築物の正面外観)を見ることになるため、建物も外向きに建てられるのです。この外向きの「ヨーロッパの都市」と異なるのが日本の都市で、日本の建築物の外側には統一感はなく、たくさんの路地が入り組み、どちらかという内向きに発展しました。

「ヨーロッパの都市」のもうひとつの要素は、都市区画の継続性です。たとえば私はリュベック出身ですが、リュベック市内の道路や広場の名称は800年前から変わっていません。その最も顕著な例がローマをはじめとする長い継続性を誇る都市で、たとえば、ゲーテの旅行記を手にローマに行っても、迷子になることはないでしょう。

編集部:ベルリンは、どのように発展しましたか。

シュティマン:ベルリンは戦後、自動車に優しい西側の米英仏占領地域と、東側のソ連占領地域に分割され、継続性が失われ、両地域ともに歴史的な都市区画、所有状況、都市類型を全く無視する形で発展しました。

私は1991年に建築担当局長に就任しましたが、新しい都市計画を策定するのではなく、戦後の発展を逆行させることを試み、1930年当時の都市計画図を改めて取り出したのです。その図面から、戦前の都市区画や、建物の町並みを読み取ることができました。「ヨーロッパの都市」を指針とする新計画と建物の代表例がポツダム広場、パリ広場、そして両広場に隣接するフリードリヒシュタット地区です。

就任後の最初の闘いがポツダム広場を巡るものでした。当時、ソニー、ダイムラー・クライスラー、ABB等ポツダム広場のデベロッパーは国際コンペを開き、全く新しい町並みを創出しようとしたが、私は、そのような企画に反対でした。コンペに優勝したのは伝統とモデルネの折衷案で、最終的にはかなり出来なものになりました。なかでも、ヘルムート・ヤーンが設計し、一番アメリカ風になったソニーセンターが最も成功したといえましょう。それはソニー、なかでも個人的にも積極的に係わった大賀典雄

社長(現ソニー相談役)が、きちんとしたメディア・ビジョンを抱いていたことに理由があったと思います。私も、ソニーセンターの映画館で映画を観るのは好きです。

編集部:シュティマンさんは、ベルリンをバロック時代をモデルに再建する構想を立てられ、「批判的再建」という概念を頻りに用いられましたが、これは、どういう意味ですか。

シュティマン:「批判的再建」とは伝統的な都市区画と町並みの構築ないしは再構築のことです。ベルリンの道路幅は最高28メートル、フリードリヒシュトラッセの幅は22メートルです。建物の高さは戦前から22メートルで、その結果、正方形に見える典型的なベルリンの町並みが誕生しました。ですから、建物の高さが40メートルあるいは80メートルになると、全く異なる印象になってしまいます。たとえば東京ですが、伝統的にはどちらかというと極めて低層の建物が並んでいましたが、戦後は高層になりこの15年間は身を反らして天を仰がないと最上階が見えないほどアメリカ風の高層になりました。こういうことは、ベルリンではあり得ません。ベルリン最大の百貨店カー・デー・ヴェーの店舗は比較的歴史の浅い建物ですが、同百貨店でさえ、ベルリンの歴史的な軒下高と呼ばれる22メートルしかありません。

編集部:「シュティマンは、近代的な建築に反対している」との批判が相次ぎましたが、シュティマンさんご自身はどのような建築が良い建築で、どの



ような建築が悪い建築とお考えですか。

シュティマン:私を批判する人たちは、都市計画と建築を取り違えるか、あるいは両者を同一視していました。

都市計画とは、統一した町並みを保障するために、個人の地所に建物を建てる際の規定を市が設けることです。したがって、都市計画は建物の設計に介入する訳で、これを多くの建築家は我慢ならぬと感じたのでしょう。

現代の建築家の多くはユニークな、すなわち他とは異なる建物を設計します。その最も顕著な例が、ビルバオに建つフランク・ゲーリーのグッゲンハイム美術館です。

その反対の例が、ブランデンブルク門の建つパリ広場です。パリ広場には軒下高や、窓枠のサイズに関する詳細な規定があります。ですから、パリ広場に建つゲーリーの建物も、それ等規定に従いファサードは砂岩で、ゲーリーの豊かな創造力は建物内部で発揮されるのです。これは、私の好きな建物のひとつで、外観は慣習に従い、内部が個性的な「ヨーロッパの都市」のプロトタイプ建物です。

現在ベルリンではベルリン発祥の地、すなわち第二次世界大戦の戦禍とドイツ民主共和国の政策により跡形も無く消え去った旧市街地、つまりベルリン宮殿地跡に建設されるフンボルト・フォーラムの東側地区の再開発を巡る活発な討議が展開されています。新生ベルリンにおける歴史と伝統の意義および役割が再度問われています。

編集部:最後の質問ですが、この20年間のベルリンの発展をまとめてください。また、シュティマンさんご自身は、ご自分の業績をどのように評価されるか教えてください。

シュティマン:自分の業績には、大変満足しています。それというのも、最初は手厳しく批判された私の構想が、今では州政府の都市計画政策になっているからです。20年前は、誰もが旧西ベルリン周辺の広いスペースに移転することを望んでいましたが、現在では街中に居住することが流行っています。このように、再建された「ヨーロッパの都市」に住み、働くことこそ、私が最初からベルリンのために目指していたことです。少子高齢化、経済金融危機、環境問題等にかんがみても、街中に居住し、就労することが必要です。

国際シンポジウム『ポスト京都議定書とグリーン・ニューディール構想——日独米のく緑のチャンス』

アンドリュー・デウィット (Andrew DeWit) 立教大学経済研究所長

ベルリン日独センター、フリードリヒ・エーベルト財団、富士通総研、立教大学経済研究所は、2009年6月10日に東京国際フォーラムで掲題シンポジウムを共催した。

『ポスト京都議定書——新たなる目標、新たなるチャンス』と題するシンポジウム前半では、小池百合子(自民党衆議院議員、元環境大臣)およびマティアス・マフニク (Matthias Machnig、独連邦環境・自然保護・原子炉安全省事務次官)の両名が基調講演を行なった。つづいて、ロバート・オアー (Robert Orr、パナソニック財団理事長、元ボーイングジャパン社長、オバマ政権外交政策アドバイザー)がアメリカの政策に関するコメントを発表し、高橋康夫(環境省地球環境局地球温暖化対策課市場メカニズム室長)が日本側のコメントを述べた。

諸氏は、それぞれ2009年度の極めて重要な展開を取り上げた。小池議員は、1990年代中盤の自身のクールビズ政策に対するメディアの批判的な報道を取り上げ、同政策はネクタイを外し、クーラーの温度設定を上げることに終始するものではなく、エネルギーの消費削減および再生可能性を促進する倫理観の浸透・普及を促進する遠大なプログラムの中核であったと述べた。より政策指向的な基調講演を発表したマフニク次官は、その講演の冒頭で、エネルギー問題・地球温暖化対策を喫緊に導入する必要性を指摘した。また、同次官は、ドイツが再生可能エネルギー部門において継続的に成果を挙げている点に言及し、シンポジウム前日にドイツ産業連盟(BDI)が「近未来におけるドイツ産業界の唯一の大きな産業セクターは再生可能・持続可能エネルギー創出である」と宣言したが、事実、同セクターの規模がドイツの自動車業界の規

模を既に上回っていることを紹介した。更に、同次官は、2009年は、コペンハーゲンにおいてポスト京都議定書が制定される年であり、これが、人類の歴史上かつて例を見ない年であると強調された。マフニク次官は、今こそ我々が責任を持って行動すべきであり、その際、「理知的な公共政策における実証済みのツールを用いて産業全体に対するインセンティブを設ける必要性がある」と極めて力強くアピールした。責任ある行動を情熱的に要請したマフニク次官とは異なり、オアー理事長は、米政治に関する極めて即物的なコメントを述べた。オアー理事長は、「産業の安定した変遷を進めるオバマ政権のコミットメントに疑いは無いが、問題は詳細事にあるだけでなく、とりわけ議会のコミットメントにある。アメリカの極めてオープンかつ繊細なガバナンスシステムは、現状維持派に対し、変遷を阻止する多くの可能性を認めている」とし、『老人と海』の隠喩を用いて、「大きな機会から誕生する法律が、様々な利害関心に基づく妥協という名の強欲な上下歯に喰いちぎられ、当初のビジョンの単なる骨格しか残らない危険性がある」と警告した。つづいて高橋室長は「日本の政治は、公的メカニズムを用いることを躊躇し、折りをみて市場促進策を導入するに過ぎない」とコメントした。「ドイツやアメリカはじめ世界各国は、全エネルギー消費における再生可能エネルギーの割合を高めるために風力発電や地熱発電等の技術利用を強く促進しているが、日本はこれとは正反対の傾向にあり、様々な問題を抱えている」と高橋室長および小池議員は共通して強調した。

シンポジウム後半は『ポスト京都議定書およびグリーン・ニューディール構想』という題名の下、飯田哲也(環境エネルギー政策研究所所長)、生田孝史(富士通総研主任研究員)、マルティン・イエニック

(Martin Jänicke、独連邦環境財団理事)、パヴァン・スグデフ (Pavan Sukhdev、生態系と生物多様性の経済学研究リーダー)、ステーシー＝D・ヴァンデビール (Stacy VanDeveer、ニューハンブシャー大学教授)の諸氏を迎えた、米国のグリーン・ニューディール構想に焦点を当てたパネルディスカッションだった。

以上のパネリスト編成により、現在進行中のエネルギー革命の中核的要素になりつつある政治メカニズムおよびプロセスに関する掘り下げた討議を持つことができた。パネリスト各位は、「現在、産業革命が進行中だが、再生可能エネルギー導入に関する公的政策やその他の促進メカニズムに従って諸国家および諸地域の進捗状況が異なる」と述べた。日本側の専門家である飯田所長および生田主任研究員は、産業界および政界の中心的プレーヤーが、公的メカニズム——マーケット・インセンティブを編成する中核的ツールと認識される固定価格買取制度(フィードインタリフ制度)およびポートフォリオ・スタンダード——を利用することを躊躇している点を強調した。イエニック理事は、「国家の重大な役割は、常に産業革命を通じて明白になる」と雄弁に語った。スグデフ研究リーダーは、持続可能なエコ・システムを育成する適切な政策を策定する必要性をグローバルな視点から提示した。ヴァンデビール教授は、地球温暖化対策に不本意なブッシュ政権下の米連邦政府に対する地方・地域レベルの攻撃的なアクションを紹介し、「米連邦体制が、革新的な州や都会の密集地に対し、地球温暖化防止および再生可能エネルギーに関する大きな政治的裁量余地を提供している事実を米国ウォッチャーは未だに充分に認識していない」とした。「オバマ政権が今後どのようになるうとも、また、同政権の連邦レベルでの目標がどうあるうとも、上述の地域レベルの発展は益々強化されるであろう。換言すると、オバマ政権の政策は、これら州レベルの革新的な政策を<ナショナル化>、敢えて言うならば<連邦化>する試みとも言える」とヴァンデビール教授は締めた。

本シンポジウムを通して、2009年が行動を起こすべき重要な年であることが明白になった。また、基調講演者、コメントーター、パネリスト諸氏の発言を通して、より強力な政策および政治的革新の必然性も顕著になった。



日独青少年指導者セミナー、2009年度ドイツ代表团日本研修旅行(2009年5月16日~30日)
 研修テーマ「困難を抱える青少年の社会性を育むための支援」
 ザビーネ・パンコーファ(Prof. Dr. Sabine Pankofer)ミュンヘン社会福祉大学(カトリック系寄付大学)社会福祉学部、学部長代理

ベルリン日独センターがドイツ連邦家庭高齢者女性青年省の委託を受け、ドイツ連邦児童青少年計画の資金を得て運営する「日独青少年指導者セミナー」の一環で日本を訪れた我々8人のドイツ人青少年指導者は、内気で気の弱そうな、それでいて決然とした雰囲気日本人男性4人(31歳から37歳まで)と会談する機会を得た。東京のNPO法人「育て上げネット」のスタッフに同行された4人は、少し前までは外界との接触が皆無の「ひきこもり」だった人たちで、うち一人は12年間も親元にひきこもりつづけていた。4人とも、自分には外出や、他人との接触や、働くことは不可能と思っていたが、今はそのための勇気を得る訓練に参加中で、たとえ東京の端から端まで通学することになっても、このような訓練の機会を得たことを喜んでいて。ちなみに、訓練費は各々の両親負担である。

元ひきこもりの彼らを前にして、我々ドイツ人指導者は「どうしたら12年間も自宅から一歩も外出せずにいられるのか」「その期間の生活はどのようなものだったのか」「家族とはどのような関係にあったのか」「社会復帰のための専門的な支援はあるのか」といった一連の質問を提起しないではおれず、また「ドイツにも同様の現象があるのか」「あるとすれば、それはなんと呼称されているのか」と自問自答した。

ひきこもりは、日本社会における個々の特異現象ではなく、流行病のように蔓延している複雑な問題である。ひきこもりは幼年期に始まる場合もあり、多発するのが思春期で、成人してなお継続する場合、成人してから発生する場合もある。ひきこもりの男女比は2対1で、ひきこもる理由としては、イジメ被害、社会不安障

害、対人恐怖症、自己肯定感の欠如、何らかの大きなプレッシャーの後遺症等々挙げられた。日本の学齢児が社会との関係を学ぶ最も重要な場は学校だが、学齢児がひきこもると不登校児になる。不登校のひきこもり児童は家庭の責任に委ねられ、外部の支援要請も家庭の方針次第だが、ひきこもり児童をもつ両親は、対応策を知らないことが多く、ひきこもる子どもを恥じるため、なかなか外部の支援を求めることに踏み切れない。我々は、親のイニシアチブによって発足した幾つかの自助組織を視察する機会を得たが、ひきこもり者に全くプレッシャーをかけない、全ての人に開かれた組織に感銘を受けた。

少子高齢化が進む中、青少年は限られた社会的資源であり、貴重な財産である。青少年がひきこもることで社会からドロップアウト(落ちこぼれ)することは社会的問題だけでなく、国民経済的な問題ともなうため、日本では、ひきこもり現象に特別な注目が集まるようになった。

日本では1990年代初頭に、青少年、学校、就労等の様々な分野における経済的、政治的、社会的変化の結果、ヨーロッパ風の個人主義が発達し、立場や地位といった従来の社会関係も変わり、多様なライフスタイルがみられるようになり、型に嵌った経歴が廃れ、「アイデンティティ」や「生きる意義」が重視されるようになった。このような変化に対するひとつの対応形態が、社会から完全にドロップアウトするひきこもりという特殊現象である。

別の対応形態として、フリーターが挙げられる。日本の伝統的なキャリアパス(職歴)は終身雇用制度に基づいていたが、現在の若者は大企業に対する信頼を喪失し、終身雇用を望んでおらず、フリーターとして労働市場を転々とする



道を選択する者が多い。また、ニートと呼ばれる若者も増えている。このような新しいキャリアパスも1990年代の諸変化の結果であり、日本の職業教育制度および年金制度に測り知れない影響を及ぼしている。

日本を訪ね、ひきこもり現象を知ることを通じて我々ドイツ人青少年指導者がドイツ社会について何か学んだとするならば、人目に触れないところで苦悩する人々、困難な状況下で己の人生のために闘う人々の声なき声により繊細になったことが挙げられる。

研修旅行から帰国後、我々はひきこもり現象が最初に感じたほど未知のものではなく、ドイツにも同様の現象があることに気づいた。ドイツの場合、社会からドロップアウトする少年や青年男子はアクションを通じて気晴らしするタイプの落ちこぼれに陥る者が多く、青少年支援の多くはこのような「攻撃的なドロップアウト者」に焦点を定めるため、日本のタイプの静かで目立たないひきこもり者は忘れられがちな傾向にある。

米国にはひきこもりに該当する概念として「apathy syndrom」という名称があるが、ドイツには適切な概念が存在しないに過ぎないだけで、ひきこもり現象そのものは実はドイツにも存在するのである。





写真左:『少子高齢化など労働市場の環境変化と日欧の対応』(2009年6月17日、東京開催)におけるパネルディスカッション。

左から:ディルク・ファウベル(Dr. Dr. Dirk Vaubel、ベルリン日独センター評議員、ローランド・ベルガー・ジャパン・パートナー)、ヘルベルト・ブリュッカー(Prof. Dr. Herbert Brückner、ドイツ連邦雇用庁雇用研究所国際比較・欧州統合研究局長、バンベルク大学教授)、ロルフ・クローカー(Dr. Rolf Kroker、ケルン経済研究所常務取締役、経済・社会政策責任者)、富山和彦(経営共創基盤代表取締役CEO)、八代尚宏(国際基督教大学教養学部教授)、司会のアンドレアス・メルケ(Dr. Andreas Moerke、メッセ・デュッセルドルフ・ジャパン社長)。



写真上:

市原慶子作品展『伝統的美濃和紙——美濃和紙のルネッサンス』のオープニング(2009年6月26日、ベルリン日独センター)

日常生活用の衣料品、花嫁衣裳、各種装身具、タオル、傘、明かり、花器、時計など全て美濃和紙で制作される作品を鑑賞しに、大勢の人々が訪れた。



写真上:

オープンハウス(2009年6月21日、ベルリン日独センター)

本年度のオープンハウスにも多数のベルリン市民が訪れ、折り紙、生け花、マンガ描きなど恒例の文化イベントだけでなく、新しい出し物「囲碁」にも積極的に参加した。



2009年7月25日から8月2日にかけて、ヤングリーダーズ・フォーラムの第4回サマースクールが「金融危機の影響」をテーマに日本で開催された。箱根湯元で開催されたフォーラム評価会には、過年度の参加者も出席した。

会議系事業(重点領域別)

国際社会における日独の共同責任

国際シンポジウム『開発協力における日独の国際責任および役割——アジアにおける国家建設』

協力機関: 国際協力機構(東京)、コンラート・アデナウアー財団(ベルリン)

開催予定: 2009年11月7日、東京開催

政治をめぐる諸状況

ベルリンの壁崩壊20周年記念シンポジウム『壁崩壊後のベルリン・<ヨーロッパの都市>としての伝統を守る首都への回帰』

協力機関: ゲーテ・インスティテュート東京ドイツ文化会館

開催予定: 2009年10月27日、東京開催

少子高齢化社会

日独シンポジウム『日独における大都市周辺地域』

協力機関: 財団法人計量計画研究所(東京)

開催予定日: 2009年10月28日～30日、東京開催

学術振興を通じた社会発展

日独シンポジウム『持続可能な生涯学習とデジタルメディア』

協力機関: 電気通信大学(東京)、グラーツ大学

開催予定日: 2009年9月10日

国家、企業、市民社会

日独会議『リスク&東アジア』

協力機関: 現代日本社会科学学会

開催予定日: 2009年11月19日～22日

日独会議『企業の社会的責任(CSR)』

協力機関: ベルリン自由大学

開催予定: 2009年12月

諸文化の対話

第3回日独韓奨学生セミナー(第10回ドイツ学術交流会奨学生セミナー)

協力機関: ドイツ学術交流会(ボン)

開催予定日: 2009年10月2日～3日

パネルディスカッション『公共空間におけるアートの役割』

協力者: ヤルグ・ガイスマー(東京)

開催予定: 2009年10月9日、17時30分

特別事業

『日独フォーラム第18回全体会議』

開催予定日: 2009年11月5日～6日、東京

開催

人的交流事業

- ・若手研究者招聘プログラム
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
 - 『日独青少年指導者セミナー』
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・日独高校生交流『たけのこプログラム』

各プログラムの詳細は『<http://www.jdzb.de> -->人的交流事業』

図書室からお知らせ

2009年9月1日から新たに貸出しサービスを開始いたしましたので、どうぞご利用ください。

ベルリン日独センター日本語講座

11月2日に、外国人を対象とする日本語講座の新学年が始まります。初級、中級、上級の各講座ともに午後5時30分から7時30分までの120分授業をベルリン日独センターで開講します。

新規受講者は10月20日(火)から23日(金)の事務時間帯および24日(土)の午後2時から4時までベルリン日独センターで受け付けます。

文化事業

コンサート

記念コンサート『貴志康一生誕100周年記念ドイツと日本の架け橋』

協力機関: 国際交流基金ケルン日本文化会館、在独日本国大使館(ベルリン)

開催予定日: 2009年9月7日、19時半

ダーレム・ムジークアーベント

(19時30分開演)

2009年11月5日: アンサンブル

「ピアノ・パーカッション」

2009年12月11日: 待降節&クリスマス・

コンサート

展覧会

市原慶子『美濃和紙展』

2009年6月26日～2009年9月30日

ヨーク・ガイスマー(Jörg Geismar) 個展『水族館』

協力機関: シュタルケ公益芸術財団(ベルリン)、(有)ネオン・フォルムリヒト(デュッセルドルフ)、レストラン大都会(ベルリン)

オープニング: 2009年10月9日、19時

展示期間: 2010年1月15日未まで



展覧会の観覧時間は

月曜日～木曜日10時～17時、
金曜日10時～15時30分です。

掲載の事業のタイトルが英語で挙げられているものは英語で開催、そのほかのものはドイツ語で開催(一部日独または日英の同時通訳付)します。

会場についてほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。

詳しくは<http://www.jdzb.de> -->各種行事



戦後、ティアーガルテン地区の旧日本国大使館建物は半ば廃墟と化していたが、1986年から88年にかけて修復され、1987年11月にベルリン日独センターが入居、1999年から再び日本国大使館建物として利用されている。



「ベルリンの壁」に係わるベルリン日独センター事業(写真左上から時計回り)

- ・ベルリンの壁を視察する第1回日独シンポジウム『土地法および土地政策』の参加者(1990年4月)。
- ・ベルリン日独センター(当時)横の道路名をグラーフ・シュペー・シュトラッセからヒロシマ・シュトラッセに変更(1990年9月)。
現在は、日本国大使館の事務棟がヒロシマ・シュトラッセに面している。
- ・フォルカー・ハセマー (Volker Hassemer) ベルリン州都市開発・環境保護長官を迎えて東京でシンポジウム『未来都市ベルリン——ベルリン2000年のビジョン』を開催(1993年9月)。
- ・ポツダム広場の再開発に関するインフォメーション・ボックスの屋上に集合した第2回欧州日本語教員セミナー参加者(1997年7月)
- ・ベルリン日独センターにて日独共同プロジェクト『ベルリン宮殿および信長の岐阜城のバーチャル再建』を紹介するエーバハルト・ディーブゲン (Eberhard Diepgen) ベルリン市長(1999年9月)。



ダーレム地区ザーゲミュンダ・シュトラッセの旧米軍下仕官クラブ、増改築後の1998年3月にベルリン日独センターが入居。

